



はるめいの

ぽおけん

セーラーームーンRPG⑤

はじめてのぼおけん

深森薫

夜と朝の狭間でまだ眠りから醒めきらぬ街、朝靄に白く煙る無人の石畳の上を、絞りたてのミルクを運ぶ荷車が軋みながら通り過ぎてゆく。その中を、旅支度を整えた冒険者の一行は連れだって歩いていた。これから一緒に旅に出る仲間を一人、迎えに寄るところである。

日中は露店や屋台が建ち並び、人・人・人でごった返す王宮前の広場も、今はしんと静まり返り、ひんやりとした空気と一抹の寂しさだけが辺りを漂っている。王の居所と浮世とを隔てる城門を横目に眺めつつ、冒険者達は広場を横切り東の通りへと歩を進めた。

やがて見えてくる、夜明け前の街に白く浮かぶ魔術師ギルドの建物。その正面の石段の、一番下にはぽつんと腰掛ける小さな影が一つ。冒険者たちの姿を見つけて、影はびよこんと立ち上がった。

黒いマントに身を包んだ小柄な少女である。背中には、大きな背負い袋。

「おはようございます！」

少女はその年齢にふさわしい声音で挨拶をした。

*

導師ブルートが彼女達を召喚したのは、昼少し前のことだった。

都市国家グラシア、またの名を『魔法使いの王国』。その二つ名の示すとおり、この街には大陸でも最大級の規模を誇る魔術師ギルドがある。その二百年あまりの歴史の中で偉大な魔術師・賢者を数多く輩出した巨大な白亜の館は『白い家』^{カサブランカ}と呼ばれ、この街のシンボルとして広く人々の知るところ

となっている。魔術の道を志す多くの老若男女がここに集い、切磋琢磨し、日々学問の修養と魔術の修行に励んでいるのだ。

彼女達は今日、この名門を仕切る最高導師から直々に用件を聞くため、ギルドの最上階にある導師の書齋に通されたのである。

「わざわざお呼びだして、申し訳ありません」

四人の冒険者を、導師は丁重に迎えた。

「いえ」

少し緊張した様子でマーズが答える。腰まで届く髪に闇色の瞳、身には黒のローブを纏った黒尽くめの魔術師。彼女はプルトの直弟子である。大恩ある師の前だけに、頭を垂れながらも仲間の様子が気掛かりだった。

まず、ジュピターの態度の大きいこと。本人は偉そうにしているつもりなど毛頭ないのだが、普段から重い鎧を着つけているためか、椅子に座ると脚を広げ、胸を張ってでーんと構える癖があるのだ。ヴィーナスはきよろきよろと室内を見回している。きちんと座ってこそいるが、ヴィーナスが何を考えているか、マーズには分かる。あの目は盗賊の目だ。金目の物を物色しては腹の中で値踏みしているのだろう。もし実行するとすれば、どこからどうやってこの部屋に忍び込むか、そんなことまで考えているに違いない。結局二人とも、タテ社会の儀礼の類とは無縁の、冒険者の世界の間人なのだ。

——もつとも、マーズ自身、そのタテ社会に嫌気がさしてギルドを飛び出した身なのだ。「とんでもありません。ギルドマスター直々のお呼び出し、光栄です」

そう言ったのはマーキュリーだった。神殿で正規の司祭を務めていただけあって、そういったタテの礼儀は心得ているようである。彼女は別にそれが嫌で神殿を出たという訳ではなさそうだが、詳しいことは不明。

「お話というのは――」

導師は気さくな調子でそう切り出した。

「――皆さん、宝探しはお好きですか？」

導師のその言葉に、まずヴィーナスがいち早く反応した。背筋をぴんと伸ばし、大きなブルー・アイを見開いて、兎を見つけた狐のような仕草で耳を傾ける。

「ええ、それは勿論。冒険者ですから」

マーキュリーの教科書通りな返答を受けて、プルートの満足げに話を続けた。

「最近見つかった文献によりますと、この町から一、二日ほど離れた場所に古い館があるらしいのです。かつての主の名はムスカード、古代王国の魔術師です。『館』といってもその時代の物ですから、『遺跡』と言った方が適当でしょう」

「……こんな大きな街のそばに、まだ未探査の遺跡が？」

マーキュリーも少なからぬ興味を示す。古代王国の遺跡といえば宝の山と同義語。一攫千金を夢見る多くの冒険者達が、荒野を歩き、密林に分け入り、今日までに幾つもの遺跡を見つけてきた。確かに、グラシアのような大都市の近郊に手つかずの遺跡が残っている、というのは意外な話である。

「そうです。そして、今日ご足労願ったのは他でもありません、皆さんにその遺跡の探索をお願いし

たい、ということなのです」

言ってプルートはテーブルの上に古文書の綴りを取り出した。

「魔術師の館ですから、恐らく魔法の品が多数眠っていると思われれます。古代のマジック・アイテムは魔導技術の研究材料として大変有用で貴重な物ですので、ギルドとしてはできるだけ沢山持ち帰って欲しいのです。報酬はあまり多くはお支払いできませんが、持ち帰られた魔法の品はきちんとして鑑定した後に正当な値段でギルドが買い取ります。魔法に無関係の品物はそのまま皆さんの懐に入れていただいて構いません」

「魔法に関係ない物、って……宝石とか？」

ヴィーナスの問いに、静かに頷くプルート。

「引き受けて、戴けますか？」

商談をまとめるのはマーキュリーの役目である。遺跡の情報というのはガセネタがままありがちだが、その点これは魔術師ギルド、しかもその最高責任者の提供であり、信憑性は申し分ない。報酬等の条件も決して悪いものではなく、立ち回り方によってはかなり実入りのいい仕事になりそうである。彼女は皆の表情をうかがった。ヴィーナスとジュピターはすでに乗り気である。いつもなら仕事の条件にはあれこれとうるさいマーズは、瞑想するように目を閉じて沈黙を守っていた。言いたいことはあるのだろうが、弟子という立場ではそういう訳にもいかないのだろう。

「分かりました。この件、喜んでお引き受け致します」

「そうですか。ありがとうございます。……それで、実はもう一つ、ついでにお願いしたいことがあ

るのですが」

プルートのそう言ってソファから立ち上がると、自分の執務机から呼び鈴を手を取った。しなやかな手つきで振るも、音は全くしない。机の上に置かれた魔法陣が、別の場所にあるもう一つの魔法陣に音を転移させる仕掛けになっているのだ。

やがてノックの音があり、続いておずおずと扉が開かれる。

「はい、先生」

開いた扉の間から少女が一人、顔を出した。見慣れぬ冒険者達の姿に驚いたように立ちすくむ。歳の頃は十歳くらい、黒のローブに身を包んだ出で立ちは、小さいながらも魔術師らしい。肩で切り揃えた真っ直ぐな黒髪の間から覗いているのは、妖精族に特有の尖った耳。しかし、純粋なエルフのそれではなく、おそらく半分は人間の血が流れているのであろう——何故なら、彼ら^{エルフ}の中に黒い髪や暗紫の瞳を持った者はいないのだから。

「ホタル、お客様にご挨拶なさい」

ホタルと呼ばれた少女は、消えそうな声でこんにちは、と、言うか言わないかのうちにべこりと頭を下げた。すくめた肩が、華奢なからだをますます小さく見せる。彼女の人見知りをするような態度は、否が応でも人目を引くその風貌ゆえに彼女が受けてきた仕打ちがどんなものであったかを物語っている。

「この子はホタル、私の直弟子です。」

「お願いというのは、その遺跡探索にこの子を同行させていただきたいのです」

魔術師と呼ぶには幼い弟子を手招きで呼び寄せ、導師はそう告げた。

「え……あの……」

混乱するマーキュリー。冒険などと言う荒事とはいかにも無縁そうな可憐な少女に見つめられては、仕方あるまい。

マーズは無表情を保ったまま、眉一つ動かさない。

プルートの構わず先を続ける。

「この子には基礎的な魔導の知識・理論と呪文は教えてあります。手前味噌なようですが、その点ではこの子は飲み込みも早く、優秀です。が、実際に術を運用することには慣れていません。

そこで、皆さんの冒険に同行させて戴いて、実戦の場で修行をさせたいのです」

「……ですが、いきなり冒険というのは、危険では？」

と、我に返ってマーキュリー。

「危険は勿論、承知の上です」

プルートは小さく頷いてその問いに答える。

「魔導は本来、机上の学問ではありません。濫用は勿論厳しく戒められるべきですが、術は実際に用いる事ができてこそ価値があるものです。そしてそのためには、危険と隣り合わせの緊張の中に身を置き、そこで実践することが一番早く且つ確実に自分の物にする方法だと、私は考えています」

導師はそこまで言って茶を一口すすると、深紅の瞳をマーズの方に向けた。

「そう。マーズ、あなたの時もそうでしたね」

「はい」

「あれは、幾つの時でしたか」

「……十歳の時です」

静かな声でごく簡潔な答えを返す姉弟子に、少女は畏敬と憧れの視線を注ぐ。

「勿論、このようなお願いは誰にでもできるものではありません。まだ見習いの、しかもまだ年端のいかない子どものこと、足手まといにもなりかねないのですから」

そう言って、導師は四人の顔を見渡した。

「ですから、こうしてあなた方にお願ひしているのです。知らない仲ではない、という気安さもありますが、何より子ども一人を連れてなにかつ危険を切り抜ける事ができるだけの力量のある方であれば、大事な弟子はお預けできません」

「あたしは」

柔らかなブロンドをくるくると弄びながら、ヴィーナスはマーズの様子をちらりとうかがった。黒髪の魔術師は沈黙を保っている。

もとより、師の言うことに異を唱えるような真似などできる筈もないのだが。

「いいわよ、別に」

「まあ、ね。誰だって、はじめは誰かの足手まといだし」

と言ったのはジュピター。格式ある魔術師ギルドの最高導師を相手にタメ口である。

「いいんじゃないの？ あたしならなら、何かあってもその子一人くらい守れるだろ」

「……そうね」

マーキュリーも、静かに首を縦に振った。

「ありがとうございます。では、この文書は皆さんにお預けします。準備に必要な経費はいくらか前金でご用意しますので、遠慮無く仰有って下さい」

満足げに微笑む導師の横で、半妖精の少女がぺこりと頭を下げる。

「よろしくおねがいます」という小さな声が、四人の耳に届いた。

*

「おはようございます！」

はじめは人見知りしていたホタルだが、冒険者達に悪意のないことを見て取ったのか、歳相応の明るい表情を見せるようになった。黒髪の間に入った耳の先が見え隠れしていることを除けば、普通の人間の少女と何ら変わらない。

「おはよう、ホタル」

少々緊張気味の少女に、マーキュリーははんなりと微笑みかける。

「おはようございます、司祭様」

「……『マーキュリー』でいいわ。あまり堅苦しいのは無しよ」

ホタルは笑顔ではい、と頷いた。

「？ えらく大きな荷物だな。何が入ってんだい？」

と、子どもの背丈に合わせてできるだけ小さくかがみ込むジュピター。ホタルは担いでいた袋を足元に下ろすと、口紐を解いて中身を披露した。

食料が少々と、水筒。

毛布に、いつも使っている枕。

分厚い本が二冊、入門者向けの魔導書と博物学の書物。

帳面と、ペンにインク壺。

ランプと、油袋。

「あー…のさあ…つと…」

「要らないものが多すぎるわね」

困ったようにぼりぼりと頭を搔くジュピターの横から、マーズがびしゃりと言った。

「外の世界では全てが勉強よ。見聞きしたことは紙に書き留めたりせず、その場で頭の中に叩き込みなさい。それから、本を持っていくのも無意味ね。本を見ながら呪文唱えたり、怪物が現れてからいちいち本を開いて調べるわけにはいかないでしょう？」

言うべき事はストレートに、厳しく。しかし決して冷たいわけではない。

マーズが弟子を取ったなら、こんな風に接するのだろう。

「今の自分の持てる力で物事に対処するの。必要な時は私が教えてあげるから。できるわね？」
ホタルの彼女を見る目は、弟子が師を仰ぐ時のそれと化していた。

「はい、姉弟子様」

「……『姉弟子様』は勘弁して」

キラキラ目で自分を仰ぎ見る少女相手に、あまり激しいツツコミを入れるわけにもいかない。マーズの表情は複雑だ。

「はい、えーと……じゃあ、『お姉さま』ってお呼びしてもいいですか」

「う……それも一寸……名前でいいわ、名前で」

「はい、えー、マーズさー」

「『様』はやめて」

「……マーズ『さん』」

マーズは軽く頷いた。

そのマーズの横に、ヴィーナスがずるりと滑り込む。

「ふーん。じゃ、あたしが代わりに『お姉さま』って呼んじゃおっかな♪」

こきつつつ！

マーズのつま先の一撃がヴィーナスのすねにヒット。子どもの手前、あまり目立たないよう、脚の振りはおくまでもシャープでコンパクトに。

「はあああああうううううう……」

「あー、それから」

煩悶するヴィーナスを横目に、マーズは部屋に戻ろうとするホタルを呼び止めた。

「その枕も、置いてきなさいね」

街を出た一行は、北に向かう街道を進んだ。『銀の街道』ほどではないにしろ、よく整備された往來の活発な道筋である。子どもの足には決して楽な行程ではないが、街道を歩いている限りは特に大きな危険も問題もない。また、主街道には、行き来する旅人のために寝泊まりをするための小屋が一定の間隔を置いて設けられており、街道を外れない限りは野宿の必要はない。中の調度といえは大きなテーブルが一つと幾つかの椅子、暖をとり煮炊きをするための炉があるくらいだが、小屋自体は丈夫なオーク材や石で造られたしっかりしたものである。それは単に雨露をしのぐためだけのものではなく、人里を離れ妖魔や獣の闊歩する領域に行く旅人達に安全な休息の場を提供しているのだ。冒険行初日、一行は街道沿いにひたすら北を目指し、日没より少し早くそうした宿泊小屋の一つに落ち着いた。

翌日、夜明けから陽が少し高くなるまで街道を歩く。正面に遠く見えていたノルン山脈はいつしか目前にまで迫り、道は地形に合わせて少しずつ東へ逸れていた。ここから一行は街道を外れ、山脈の裾野に広がる森の中へと踏み込んでいく。初めのうちはちょっとしたピクニック気分ですべて進めていたが、次第に森は深くなり、生い茂る樹木や下生えが行く手を阻んだ。

「歩きにくいったら、もう！」

先頭を歩くヴィーナスが苛立ちを露にする。

「代わろうか」

そう言っただけでジューピターは手斧を取り出すと、彼女に代わり前に出た。まわりつく蔓や灌木の小枝の刺も、硬い鎧には大して気にならない。腰の高さほどの丈にまで伸びた幼木を硬いブーツで踏みしだき、邪魔な枝葉を薙ぎ払って道を作りながら進む。その後ろをマーズ、続いてホタル、マーキュリーが続いて歩く。

「ねえ。あたし達が行く遺跡って、魔術師の屋敷よね？」

お役御免になって最後尾に回ったヴィーナスが、独り言のように訊いた。

「要するに普通の家なわけよ……だったら、何でこんなところに建てたのかしら？」

「古文書の地図では、この辺りはこんな大きな森にはなっていないかったわ。この何百年の間に地形が変わってしまったのね、きつと」

疑問に答えるのはパーティーの知恵袋、知識の神に仕える司祭の役目である。

「……でなくても、別に不思議な事じゃないわよ。魔術師なんて、どこかズレた変人だらけなんだから」

その後にマーズが、半ば自嘲気味に言い放つ。

「なまじ魔法なんかが使えると、それだけで他人より偉くなった気がして傲慢になったり、自分が一番正しいと思いきなりね……ホタル、そうならないようにあなたも気をつけなさい」

「はいっ」

キラキラ眼で素直な返事をかえずホタル。

と、先頭を歩いていたジュピターが唐突に足を止めた。

「何？ なにか――」

「しっ！」

訝しむ声を遮って、ジュピターは耳を澄ます。

「今、その藪が動いたみたいだった」

「確かに――嫌な気配ね」

ヴィーナスもシヨート・ソードの柄に手をかけた。

パーティーは互いの距離を詰めて襲撃者への警戒を強める。

ざしゅしゅしゅううつつ！

襲撃者の不意討ちは上から。

「きゃ！」

緑鮮やかな太い蔓が、鞭のようにうねりながらホタルの首に巻き付く。

ざちゅつつ！

ジュピターの手斧が一閃、たちまち蔓を切り落とした。反応が早い。

すぐに四人がホタルを囲んで背中合わせに、護るように四方を固める。それまで静かだった森が、せわしない葉擦れの音でざわめきはじめた。

「ホタル！ 大丈夫だ！ ちゃんと護ってやるから、いい子にしてな！」
叫んで、ジュピターは手斧を収めてバスタード・ソードを抜く。

ざざざざざああっつっ！

次の瞬間、冒険者達に向かつておびただしい数の蔓が一斉に伸びた。

「くっ……のお！」

ジュピターとヴィーナスは懸命に武器を振るう。大剣を激しく振り回すジュピターとは対照的に、ヴィーナスは体捌きで相手をかわしながら狙いを定め、シヨート・ソードを鋭く繰り出す。二人とも手だれの冒険者だけあって、次々に蔓を切り捨てていた。

マーキュリーとマーズは魔法で応戦する。

「『光ウイルトオーケイストの精霊よーー！』

マーズは光霊に呼びかけた。次々に現れた光球は蛇のように不気味にうねる蔓めがけて飛び、衝突した瞬間にばあっとな強い光と熱を放つと、再び精霊界へと還ってゆく。後には生木の灼ける臭い。

ずばぶしゅうっつ！

『加護』を意味する合い言葉とともに、マーキュリーが『気弾ブレイク』の術を放つ。柔らかな外見とは裏腹にその掌から放たれる力は凄まじく、襲いかかる蔓は粉々に打ち砕かれ緑の破片となって周囲に飛び散った。

「キラール・クリーパー……この辺りの蔓、全部そうね。気付かなかったなんて、迂闊だったわ」

マーキュリーは呟き、胸の聖印を握り締め神に祈った。

冒険者達に触手を刈り取られ、キラール・クリーパーの攻撃は一旦止まった。が、

ざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざ

藪の中を蠢く不気味な葉擦れの音は絶え間なく続いている。キラー・クリーパーは時に一株で数十メートルにも生長することがあり、少々刈ったくらいではその生命力と飽くなき「食欲」を萎えさせることはできない。

「ホタル！」

立ちすくむ少女に、マーズが呼びかける。

「『発火』の術は、使えるわね？」

呆然としていたホタルは、我に返ったようにはい、と答えた。

「なら、その枯れ木に火をつけて。そしたら、私の魔法でこの化け物を一気に焼き払うから。

失敗は無しよ。しっかり集中して。いい？」

「はい！」

答えてホタルは大きく息を吸うと、呪文の詠唱を始めた。火打ち石代わりの初歩の術とはいえ、魔法を使うということは見習いの彼女にとって大変な作業である。ましてやこんな失敗の許されぬ緊迫した場面ともなれば。

ざざざしゅざざがざあつつつ！

再びキラー・クリーパーの襲撃。ホタルの呪文が途切れた。

「続けて！」

マーズの一喝。再び呪文を唱え始めるホタル。少し舌足らずな上位古代語に応え、指輪が光る。

「『発火』！」

力あることばとともにマナの力が解き放たれ、

ずぼぼぼぼうぼぼうぼうっつ!

立ち枯れた木が、丸ごと巨大な火柱に包まれた。

「ひゃっ!」

「きゃ!」

炎は一瞬大きく膨れ上がり、手近にいたヴィーナスとマーキュリーの目と鼻の先まで届いた。

キラール・クリーパーの無数の蔓も、びくりと痙攣したように波打つ。

「……………はっ」

マーズも思わず呆気にとられたが、すぐに気を取り直し呪文を口ずさんだ。

「『火の精霊よ——』!」

ずびびびごうっつ!

燃え上がる枯れ木から炎の蔓が幾筋も伸び、人喰い葛に襲いかかる。

形勢は逆転した。

じたばたと苦悶するようにならぬキラール・クリーパー。いくら暴れてもまとわりつく火は消えない。精霊の力で強められた炎は、生木であろうがお構いなしに燃やすのだ。青臭い白煙を上げながら蔓は次第におとなしくなり、やがて力無く地に落ちた。

「ふう。やったか……な?」

ジュピターは横たわる蔓を爪先で突っついて、動かないことを確認すると大きな息を一つついて剣

を鞆に収めた。

「ホタル、怪我しなかったかい？」

「え、あ………はい！」

少し間をおいて、ホタルは答えた。年端もいかない少女のこと、本物のモンスターを目の当たりにしたのも、ましてや襲われたのも生まれて初めてなのだ。そのショックが尾を引いているのも無理はない。

「あー………ホタル？」

「はいっ！」

マーズの呼びかけに、瞳をキラキラさせながら答えるホタル。あの化け物に呪文の一撃でとどめを刺した姉弟子様を、見上げるその眼はすでに『お姉さま♡』モード。

「い………今のは、その………『発火』の呪文よ、ね？」

思わずたじろぎながら、マーズ。ヴィーナスやジュピター相手の時のように「何なのよ今のわっ！」とか「どーしてそんなシヨボい呪文であんな火柱が上がるの！」などとキツイ言葉を浴びせるわけにもいかず、勝手が違ってかなり苦しそうである。

「はいっ」

きらきらきらっ

「うっ………まあ、その………ちゃんと火もついた訳だし………よくやったわ」

「はいっ！ ありがとうございます！」

ホタルは満面の笑みで答えた。

「ねーええ、まだ着かないのお？」

最後尾を歩きながら、焦れたようにヴィーナスが問う。

「そうね、そろそろ、このあたりの筈なだけど」

地図を眺めながら、マーキュリー。

「るさいわね。古代の遺跡がそんなに簡単にはいはい見つかつたら、有難味がないでしょうが」

マーズの愛想なしは相変わらずである。

「すぐにはちよつと特定できないわね。今の地形はこの地図の時代とは違つてるし」

マーキュリーは、マーズの突つ跳ねるような物言いをフォローするように丁寧な答えた。

と、

「あつた！」

先頭を歩いてきたジュピターがふいに大声を上げ、足を止めた。

鬱蒼とした樹木はそこで途切れ、明るい光に満たされた空間が開けている。その中心に、金持ちの館風な、石造りの古びた構造物。「古代王国の遺跡」という呼び名は少し仰々しく感じられるものの、一面を緑の蔦に覆われて所々が風雨に削られ崩れかけているあたり、時の試練を経た風格のようなものを感じさせる。

「なんだあ。遺跡って割には、何かこじんまりしてるな」

「遺跡、っていっても個人の邸宅だもの。こんなものよ」

そんなやりとりをするジュピターとマーキュリーの傍らで、冒険者見習いの少女は初めて目にする古代魔法文明の片鱗に胸をときめかせた。

「ま、何にしても、私達が探してたのはこれに間違いなさそうね」

マーズの口調は素気ないようだが、慣れた者が聞けば彼女が御機嫌なのだ分かる。

「とりあえず、入口を探しましょうー」

「ちよつつつ、と、待って。……それどころじゃ、なくなりそう」

遮るヴェーナスの口調の強さに、皆が振り返った。

唸り声とともにがさがさと茂みを揺らし、灰色の獣が姿を現す。

ホタルが表情を強張らせた。

「草の化け物の次は狼、って……いーかげん勘弁してほしいわ」

言ってヴェーナスは金糸の長い髪をはらりと後ろに流しつつ、ショート・ソードに手をかけた。

「仕方ないだろ、あたしらの方が奴らの縄張りに入り込んでんだ」

ジュピターも再び剣を抜き、皆を庇うように前に出る。

一匹、また一匹、狼は双眸を爛々と輝かせ、冒険者達を囲むように木々の間から現れ、そのうちの血気盛んな一頭が地を蹴って襲いかかった。

ぎゃん！

バスタード・ソードの一振りがそれを許さない。狼の体は地に叩きつけられて小さく跳ねた。睨み合い、にじり寄り、後ずさる、野獣の群と冒険者。

「ホタル」

マーズが少女に問いかける。

「この状況で、魔術師は何をするべきか。分かる？」

ほんの少しの動揺もないその口調の冷静さに、ホタルもすぐに落ち着きを取り戻した。

「え、えと……」

「前で戦う二人を援護すること。敵の数を減らす。倒さなくても、無力化できればいいわ」

「！ 『眠りの雲』、ですか……？」

おずおずと見上げる少女に、マーズは大きく首を縦に振った。

尊敬する姉弟子様のお墨付きを受けて、呪文を唱え始めるホタル。初歩の術法の中でも難しい部類に入るのだが、少女はその小さな手で正確に印を結び、呪文を紡いでゆく。

「『空気よ変われ、万物の根源マナの力で、眠りをもたらす見えざる雲に』！」

ずぼぼぼんっ！

見えざる雲、の筈なのだが、心なしかうっすらと黄色くも見えるようである。しかし効果の方はてきめんで、魔法によって生み出された睡魔に魅入られた狼たちは次々に地面に倒れた。

ついでに味方も巻き込んで。

「うわっ、ぶっ！」

ヴィーナスは辛うじて抵抗したが、その隣で剣を構えていたジュピターは睡魔の手に落ちた。何はともあれ、狼と冒険者との戦いは、剣劇に至ることなく終わりを告げる。

「ホタル！」

マーズの口調が一転して強いものになった。

「術に味方を巻き込んで駄目！ 相手もみんな眠ったからいいけど、下手すればこっちの命が危ないのよ！」

「はいっ……ごめんなさい……」

うるるっ

「うっ……」

大きな瞳が悲しげに潤むと、途端にマーズの口調が鈍くなる。

「……って……と……まあ、失敗を恐れてちゃ、何もできないわね……狼の方はきっちり眠らせたんだし、見習いにしちゃ出来よ、うん……これからは、気をつけなさい」

不慣れなきこちないフォローと誉め言葉にしかし、少女は表情を明るくしてはい、と答える。

マーズは指先で額を押さえ、特大の溜息を一つついた。

「ねえ……マーズ」

苦悩するそのマーズを、ヴィーナスが呼ぶ。

「あによ」

「ジュピターが起きないんだけど……ちよいジュピター！ いー加減起きなさいって！」

と言いつつ、ヴィーナスはぶつ倒れたジュピターの体をゆさゆさと揺さぶる。

「をい！」

額をぺしぺし。

「もしもおーし！」

頬をばしばし。

「ああ面倒くさいわね、ジュピターの一人や二人、蹴るか殴るかすりゃ起きるでしょ！」

「だからあ、起きないんだってば」

渋々マーズは呪文を唱えた。その言葉と動作の流暢さはホタルとは比較にならない。

その姿に見入りつつ、またまた『お姉さま♡』モードにトリップするホタル。

「『解ディスベル・マジック 呪』」

あらゆる魔法の力を無にする呪文。これでジュピターは何事もなかったように目を覚ます。

すびよー ひゆるるるうう

……筈だったのだが。

「起きない……わね？」

「んなこと見りゃわかるわよ」

ヴィーナスのツツコミに、ムツとするマーズ。

その横から、マキユリーがしずしずと進み出た。

「仕方ないわ。それじゃ、私が」

「私が、って、何か方法あるわけ？」

無然として訊ねるマーズに、マーキュリーは微笑んでええ、と答えると、眠るジュピターの傍らにひざまづいてその顔を覗き込んだ。

「……ジュピター」

何時になく甘い声で、囁くようにその名を呼ぶ。

薔薇色の小さな唇がゆっくりと近付く。

「わお☆」

ヴィーナスがひゅうと口笛を鳴らした。

「ちよ、ちよっ！ マー、こ、子どもの前で！」

マーズは柄にもなく慌てて、ホタルの目を両手で隠す。

周囲のどよめきをよそに、マーキュリーは囁きを続けた。

「ジュピター、ご飯よ」

「う……うん？」

思わずひっくり返りそうになるマーズ。ヴィーナスはちっ、とつまらなそうに舌打ちをした。

「晩ごはんの支度ができてるわよ」

「うん……」

「特大のキング・チキンのローストが待ってるわ。早く行きましよ」

「うん……わあった、行くよ」

ジュピターは気怠そうに答えた。まだ起きられない。

「早く来ないと、マーズとヴィーナスが全部食べちゃう、って」

「うん……え？ あ、行く行く、起きる！」

勢いよくがぼっ！ と起き上がるジュピター。寝起きの眼に、ジャングルの緑が眩しい。

「目は覚めた？」

「あれ……チキンは？ キング・チキンのロースト！」

ジュピターはボケた頭を押さえつつ、覗き込むマーキュリーの肩越しに、鋭い視線をマーズとヴィーナスに向けた。

「？ 何のこと？」

「っあ、晚ごはん……キング・チキンのロースト……」

何事もなかったようににっこりと微笑むマーキュリーの表情に、ジュピターは辺りをきよろきよろと見回すと、頭一つ掻いてしばし考えこみ、

「……夢？……うーん、夢かあ。なあんだ、ちえ」

やがてズボンの泥を払ってゆらゆらと立ち上がった。

「さあ、館も見つかったことだし、早速中に入って調べましょう」

マーキュリーはぼんと手を合わせ、すっかり脱力した仲間たちにもそのにこやかな笑顔を向けた。

生い茂る蔦にすっかり覆われていたものの、館の入口は大した苦もなく見つかった。

「わあ、本当に、魔法王国の建物なんですね！」

ホタルは声を弾ませながら、風雨に削られてすっかり消えてしまった古代語の文字を読みとろうと目を凝らした。出発してからここまで、初めてづくしの旅。こうして本物の古代魔法文化の一端に触れるのも、やはり初めての経験である。

「さて、それじゃー」

「なんだあ、このドア腐ってんじゃん」

げごばぎやっつ！

と言うが早いか、ジュピターは朽ちかけた木製のドアを思いきり蹴破った。

あまりのことに思わず絶句する一行。ヴィーナスに至っては、鍵開け用の針金を握り締めたまま凍り付いている。口を開けた玄関の奥からは、遺跡独特のひんやりとした、埃っぽいようなカビ臭いような空気が奥から流れ出てきた。

「ほおら、開いた開いた」

「なっ……なに考えてんのあんたわっつっ！」

最初に復活して口を開いたのは、やっぱりマーズ。

「何もなかったからいいけど、罨でもあったらどうすんのよっつっ！」

「そうよジュピター、ドアには気をつけなと。開けた途端にモンスターとご対面とか、落とし穴が開いてみんな串刺しとか、吊り天井が落ちてきて全員潰しアンパンとか、鍵穴から噴き出した毒ガス

を吸うとキノコ人間になるとか、実は一方通行の扉で閉まったら最後——」

「マーキュリー、そーいうエグい話はやめよ？ ほら、ホタルも引いちゃってるし」

たじたじとツツコミを入れつつ、鍵開け道具をしまうヴィーナス。そのエグい話を聞いてしまったホタルは、耳の先まですっかり固まっている。

「そう？ 他にもたくさんあるんだけど」

マーキュリーは残念そうに話を中断した。

「……まあ、いいわ。とりあえず先に進みましょう」

溜息一つついて、マーズ。彼女もエグい話に毒気を抜かれたのか、先刻のような剣幕はない。

「明かりが要るわね。ホタル、『光明』の術」

「はいっ！」

元気にお返事をして少女は呪文を唱え始めた。『光明』といえは魔術師を志す者がまず最初に習う、初歩中の初歩の魔法である。

「『万物の根源マナよ、その力、光となりて闇を払え！』」

ずぼぼもんっっ！

「のわあっっっ！」

「きゃっっ！」

一瞬巨大な光球が姿を現し、大音響とともに弾けて消えた。

「あっ、ご、ごめんなさい！ もう一度——」

「まま待つて！」

呪文を繰り返そうとするホタルを、マーズは慌てて止めた。

かといって、無碍にやめろと言うわけにもいかない。

「待つて……その……とりあえず、私がやってみせるから、よく見ときなさい」

「はい！」

きらきら輝くホタルの瞳に映らぬように、マーズは特大の溜息をまた一つ、ついた。

彼女の苦悩は深いが、気を取り直して呪文を唱える。

「『――光となりて闇を払え』」

いつものようにヴィーナスのかざしたショート・ソードに、魔力の灯がともる。闇に閉ざされていた空間を白い光が満たし、館の内部の様子が浮かび上がった。

「わあ……」

しきりに辺りを見回すホタル。書物でしか読んだことのない古代の魔術師の物語、その舞台となった場所に、今彼女は立っているのだ。興奮するのも無理もない。

玄関ホールは吹き抜けになっており、フロアの真ん中には落ちたシャンデリアの残骸。足元のカーペットは、埃と砂に埋もれてこそいるが毛足の長い上物だ。古代王国の時代、強大な魔力を操る者は即ち強大な富と権力を所有していたという。小さいながら贅沢な造りのこの館の主も、やはりそれ相應の力の持ち主であったのだろう。

正面の階段は二階に向かって優美な弧を描いて伸び、壁に大きな肖像画が掛けられている。

「へえ。結構いい男じゃん」

「名前が書いてあるわ。『ムスカード・ド・エアリーズ三世』だって」
額に付けられた銘板を見つけたマーキュリーが、古代語の文字を読み上げる。

「間違いなく、ここが私達の探してた遺跡ね」

「さあて、それじゃ、行きますか。お宝探しい！」

魔法の明かりを掲げたヴィーナスを先頭に、一行は探索を開始した。

「ふん♪ふん♪このあたしにかかっちゃ、こんなの隠しているうちに入・らーな・いー」

皆が書斎の中を物色している間に、盗賊は自慢のブロンドをかき上げながら、壁面に巧妙に偽装された扉を探り出した。続いて彼女は盗賊の七つ道具から鍵開け棒を取り出すと、指先で器用にくるくると回す。

「ふん♪ふん♪こんなの鍵のうちに入・らーな」

こきいーんっ

軽快な鼻歌は、不意に甲高い金属音で遮られた。

「うあっ……あぢゃー、やっちゃったあ……」

「調子に乗ってるからよ」

氷点下三十度の、マーズのツツコミ。

「穴が詰まっちゃったわねえ……魔法であけるしかないわ、これ」

鍵穴と折れた鍵開け棒とを交互に見ながら、ヴィーナス。

「はい！ 『開錠』^{アロック} いきますー！」

と、ここまでの旅ですっかり主体性の育ったホタルが、自発的に呪文を唱えはじめた。

「『——開け』！」

ぢゅぼーんっっ！

「きゃっ！」

「んわっ！」

何の前触れもなく破裂した錠前は、百合の花弁のように金属がめくられて風穴が開いた。

「ホタル……」

珍しく弱ったマーズ。もうどこからどう突っ込んでいいかわからない。

「はいっ」

明らかな失敗に、ぐつと唇を噛みしめるホタル。

「……次にやるときは……もう少し静かに開けなさいね……」

「はいっ！」

子どもには甘い、姉弟子である。

扉の奥は、小部屋になっていた。他の部屋とは趣を全く異にする、何もな——絵の一枚も、絨緞の一枚も、家具の一つすらもない、殺風景な部屋である。突き当たりにはさらに奥へと続く扉、そし

てその正面には、赤黒い鍔の浮いた彫像が据えられていた。

『「ゴ主人様、契約ノ言葉ヲ」』

「置物がしゃべった！」

驚くホタル。しかも、彫像の発したのは下位古代語ロー・エンシェントである。

「……番人ね」

マーズはホタルを庇うように一歩踏み出した。

「ええ。たぶん、アイアン・ゴーレム」

「ゴーレム！」

マーキュリーの言葉に、さらに驚くホタル。

「ゴーレム、って、もっと大きくて、ごつごつしてて、マジンガーZみたいなんじゃないあ？」

「……まじんがあZ、って？」

意味不明の単語に眉をひそめるマーズ。

『「ゴ主人様、契約ノ言葉ヲ。サモナクバー」』

鉄の人形は、その体と同じく赤黒い鍔の浮いたグレート・ソードを構えつつ再び問うた。

「契約の言葉、って……」

「話の分かる相手じゃなさそうだな」

ジュピターも剣を抜くと、マーキュリーを庇うように最前列へと進み出る。

『「――排除スル」』

「はあっ！」

ぎんっつ！

戦いの火蓋が切って落とされた。

手練れの戦士であるジュピターに比べて、鉄の体を持つゴーレムの動きははるかに鈍重だった。ゴーレムが大剣を一振りする間に、ジュピターは狙いすました斬撃を二度、確実にゴーレムの体に叩き込む。が、鉄の体は頑丈で、いくら打ち据えてもいつこうに効いている様子はない。

ぎゃぢんっつ！

ゴーレムの剛腕が繰り出す斬撃を、自分の剣で受け流すジュピター。火花を散らして打ち合う金属音は、剣が悲鳴を上げているようにも聞こえた。

がちゃっ！

「ぐっ！」

力任せに振り回されるゴーレムの大剣が、ジュピターの胸を打った。鎧の上からとはいえ、衝撃は大きい。

ばっきーんっ！

背後からの不意打ちになるはずだったヴィーナスのショート・ソードは、刀身がその衝撃に耐えられずに不発で終わった。

「んげげっ」

「『加護を』！」

「『——光の精霊よ！』」

マーキュリーとマーズの魔法。衝撃波と白い光がゴーレムを襲う。鉄の人形が轟音をたててひっくり返った。

「ジュピター！」 マーキュリーが叫ぶ。

「大丈夫！ ……あたしよりも、剣の方が、持ちそうにない」

咳込むジュピター。荒い息を落ち着かせて立ち上がる。

「ホタル！ ジュピターの剣に『魔力付与』！」

叫んでマーズは呪文を唱える。息をつく間すらも惜しむように。

「『万物の根源たるマナよ。その力、破壊の炎となりて全てを焼き尽くせ』！」

真紅の火球がマーズの頭上に現れる。火球は真っ直ぐにゴーレムの元へと飛んでゆき、

ぐごがごおっ！

轟音とともに弾けた。天井が揺れ、砂と石つぶての雨が降る。

「早く！」

マーズの声に突き動かされるように、ホタルは呪文を唱えた。

「『万物の根源マナよ、力となりて彼の刃に宿れ』！」

力あることばに応えるように、ジュピターのバスタード・ソードが光を纏う。

「うおおおりやあああ！」

ジュピターは輝く刀身を気合いととも振り上げ、

「ああうあうわ熱っちい！」

放り出した。床に転がった剣はますます光を強め、柄に巻かれた革紐がぶすぶすと細い煙を立ち登らせた。

そんなことにはお構いなく、ゴーレムは襲いかかる。

「ジューー」凍り付くマーキュリー。

ジュピターが動いた。自らゴーレムの懐に飛び込む。考たわけではない。ただ、生き残るための本能と戦士としての才覚がそうさせたのだ。

肩を激しくぶつけ、腕を取った。

自分の体を軸に振り回し、ゴーレムの体を石の壁に叩きつける。

「マーキュリーっ、手斧、あたしの荷物から取って！」

「ああ世話が焼けるわねっ！」

悪態をついたのはマーズ。その手は休みなく印を切り続ける。

『『万物の根源マナ、その力、光の矢となりの的を貫け！』』

ひゅごごごごううっっ！

倒れたゴーレムに光の矢は雨霰と降り注いだ。容赦のない攻撃は確実にゴーレムの仮初めの命を削り取っているが、彼女の気力もまた限界に近付いていた。

「ごっ、ごめんなさいっっ！」

「泣くのはこいつを倒してから！」

今にも泣き出しそうなホタルを一喝する。

「ジュピター、取って！」

マーキュリーの声。手斧が床を滑る。

斧はジュピターの手の中に収まった。

ぎぢっ！

振り向きざまの渾身の一撃。斧は肩の継ぎ目に食い込み、ついにゴーレムの右腕を削ぎ落とした。張りつめた戦いの空気に、一瞬の隙間が生まれる。

「『……万物の根源マナ』」

その隙間を埋めるように古代語の呪文が響いた。

マーズの声ではない。少し舌足らずだ。

ホタルの声だ。

「『その力、光の矢となり——』」

半妖精の少女の小さな両手が複雑な印を切る。

「『——的を貫け！』」

びしゅしゅごしゅうっつ！

光の「矢」どころではない。

巨大な光の奔流がジュピターの前髪を掠め、アイアン・ゴーレムを飲み込んだ。残った手足が飴のように曲がり、床に崩れ落ち、苦悶するように蠢く。

やがて光は消え、後には動かない鉄の塊が残された。

「うわ……」

「すご……」

呆然とする冒険者達。その後ろで、ホタル自身もまた石の床にくずおれた。

「ホタル！」

「大丈夫、気力を使い果たしただけよ」

昏倒した少女を抱き起こしながら、マーズ。

「こういうことは……もう魔法は使えないわね……」

と、マーズ。

「……よかった……」

四人分の溜息と呟きが、空の小部屋にハモった。

*

「うーん。暗くなる前に森を抜けるの、無理かしらね？」

ヴィーナスは元来た道を進みながら、空を見上げた。

「さあね。できれば、こんな森の中で野宿は御免だし、急ぎたいけど」

荷袋を担ぎなおすマーズ。

「こう荷物が多くちゃ、ちょっと無理ね」

ゴーレムが護っていた隠し小部屋は魔術師の研究室だったらしく、ギルドの賢者達がよだれを垂らして欲しがるような魔法の品々で一杯だった。そのおかげで、帰りの道はお宝のぎっしり詰まった袋を四人がかりで幾つも抱えて帰ることとなったのだ。ちなみに、気力を使い果たしたホタルはジュピターの背中で眠っている。

「マーキュリー、やっぱ、その荷物貸しなよ」

「え？ あ、でも」

「だあい丈夫」

マーキュリーが答えるより先に、ジュピターはホタルをおぶったまま、彼女の肩から器用に荷物を取った。

「あのお……ジュピター、あたしも袋担いでんですけど？ しかも、二つも」

半ば拗ねたように、大分呆れたように、ヴィーナス。

「これ以上は無理」

○・五秒で答えるジュピター。

「あ……そお」

聞くんじゃないかった、とヴィーナスは心から思った。

「まあ、いいわ。収穫も思いっきりあったんだし、今はとにかく早く帰ってゆつくりしたいわね」
そう言う今のマーズは、この数日間がいちばんご機嫌が良さそうである。

「そうね。でも、帰ってから結構大変よ」

答えて、マーカーリー。

「これだけ沢山のマジック・アイテムですもの。使い道の分からない物もあるし、鑑定だけでもギルドを上げての大仕事になると思うわ」

「……その『ギルドを上げて』っての、私達も入ってるわけ？」

「嫌だ、マーズったら。貴女は元々ギルドのメンバーでしょ？」

思わず顔をしかめるマーズに、マーカーリーは軽く笑ってツッコむ。そして、

「鑑定は私も手伝うわ。勉強になるし、第一、苦労して手に入れた品ですもの。ちゃんと見て、然るべき値段をつけていただかないとね」

そうつけ加え、にっこりと微笑んだ。

そんな大人達の会話も、生まれて初めて挑んだ冒険の成果も知ることなく、ホタルは未だジュピターの背中で眠り続けていた。

はじめてのぼおけん

セーラームーンRPG⑤ はじめてのぼおけん

著 深森薫

表紙 飛鳥圭

2000年 3月 初版発行

2023年 4月 PDF化にあたり加筆修正

発行者 Bitter & Sweet (深森薫)

<http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/>